

第2節 出土埴輪と七輿山古墳の位置付け

(1) 出土埴輪について

第51図は群馬県内の6世紀初頭から前半に位置づけられる前方後円墳から出土した円筒埴輪の中で比較的形状を知ることができる多条突帯の資料を掲載したものである。1から9は七輿山古墳出土の円筒埴輪である。

今回報告する七輿山古墳出土の円筒埴輪はその全体形状を確認することができる資料はなかった。すべての個体が一律ではないが藤岡市教育委員会調査資料である6から9を見ると器高1m前後、7条8段構成あるいは6条7段構成の資料の存在が確認されるところである。口径は35cm前後と40cm前後の大小2種類があることは既に指摘されているところである。

朝顔形埴輪は今回報告分でも残存状態の良好な資料はなかったが4・5に見るように普通円筒と比較して胴部径が細い形状であることがわかる。

各部位の特徴としては貼付口縁の個体、低位置突帯の個体の存在があげられる。また、外面の調整は大半がタテハケであるが、一部に二次調整のタテハケや二次調整のヨコハケが施された個体が存在することも周知のとおりである。また、この点についても既に指摘されているところである⁽¹⁾が、一部の個体において突帯貼付に際し、断続ナデ技法Aが採用された個体が存在することも第2章第2節1に記したところである。

10から12は七輿山古墳に供給されたと考えられる猿田Ⅱ遺跡埴輪窯出土の大型円筒埴輪である。窯出土埴輪は山田俊輔氏により型式学的な検討が加えられている⁽²⁾。掲載の大型品は山田氏により第3段階、陶邑古窯址須恵器編年のTK10からMT85型式に平行する時期に位置づけられた資料の一部である。全体形状を把握することができた資料はなかったがその特徴は多条突帯、貼付口縁、低位置突帯、外面調整タテハケなど七輿山古墳出土埴輪との共通点が多く見られる。

21から23は6世紀初頭に築造された安中市築瀬二子塚古墳の円筒埴輪である。掲載した普通円筒は下半部の残存であるが基底部の長さが胴部段間長の約半分、広義の低位置突帯に含めて考えられているものである。外面

の調整は大半がタテハケである。透孔の形状も円形が主体である。また、掲載はしなかったが単口縁の他に貼付口縁の資料が一定量含まれている。

18から20は6世紀初頭に築造された前橋市前二子古墳出土円筒埴輪の一部である。形状は4条5段構成である。器高は60cm余、口径は45cm前後であった。器面調整はタテハケが主体で、一部にC種ヨコハケが見られる。

24から26は6世紀中葉に築造された前橋市中二子古墳出土の円筒埴輪である。形状は主に5条6段構成である。復元された器高は48cmから63.5cm、口径は21cmから40cmであった。器面調整はタテハケが主体であるが、C種ヨコハケがわずかに見られるとされる。

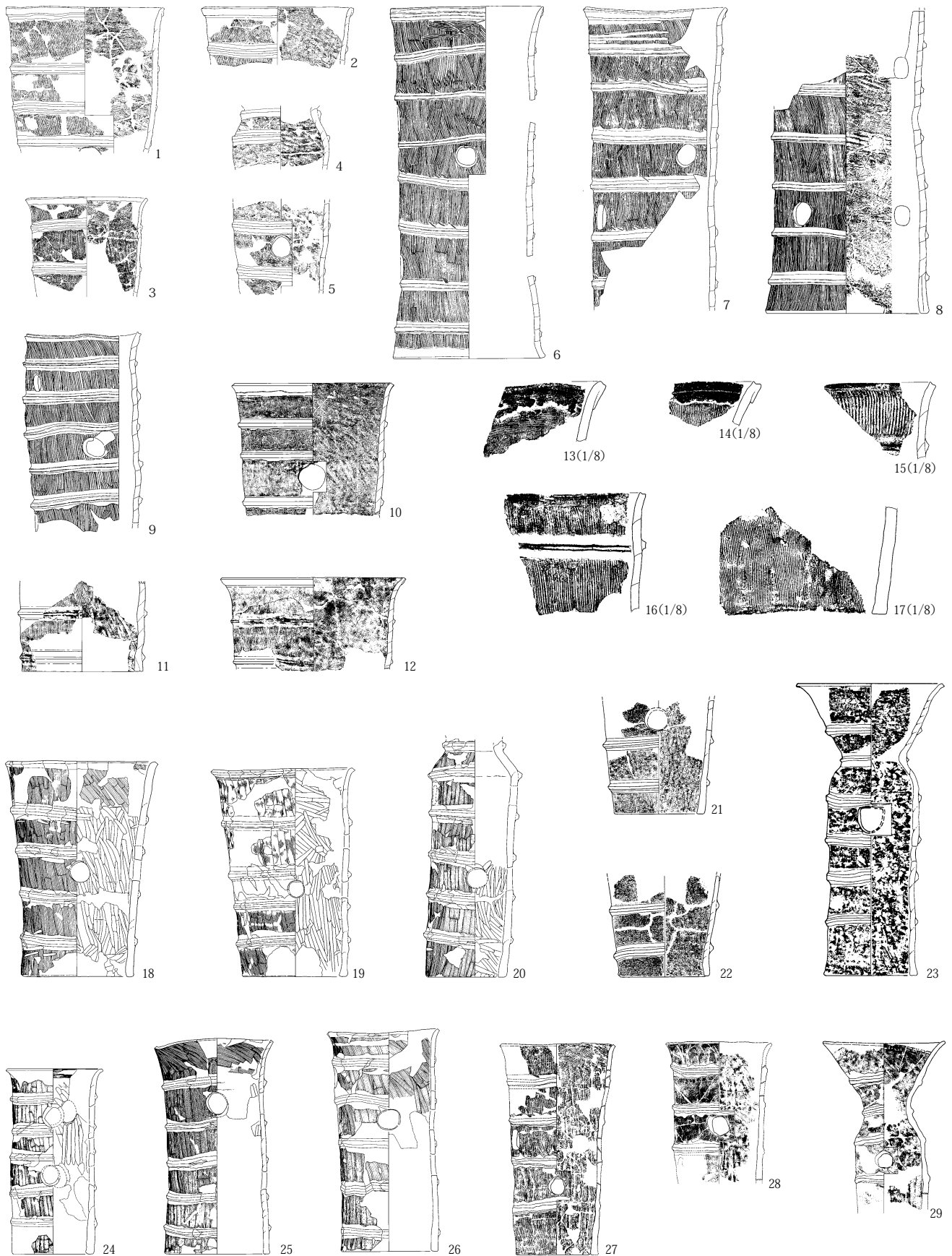
27から29は6世紀中葉に築造されたと考えられている富岡市堂山稲荷古墳（一之宮3号古墳）出土の円筒埴輪である。普通円筒埴輪の全体形状は4条5段構成である。27の器高は57cm、口径33.7cmである。器面調整はタテハケである。低位置突帯が認められる。貼付口縁の資料も存在するとされる。

13から17は七輿山古墳と同じ白石古墳群中の江原塚古墳出土資料で、貼付口縁の個体が存在することで知られている。貼付口縁の資料は七輿山古墳、前述の築瀬二子塚古墳や堂山稲荷古墳の他は、高崎市綿貫観音山古墳や前橋市金冠塚古墳、太田市駒形神社埴輪窯跡集積場などと6世紀後半の前方後円墳、埴輪窯からの出土が認められる。江原塚古墳は直径20mの円墳で、横穴式石室の形状から6世紀後半の築造と考えられている。

低位置突帯の円筒埴輪については新山保和氏の集成・研究がある⁽³⁾。それによれば群馬県東部地域では円墳への樹立が3例見られるが全県的には前方後円墳を中心に採用されており、6世紀後半に盛行する。

以上のように6世紀前半の大型前方後円墳に採用されていた円筒埴輪の形状について見ると同じ多条多段でも築瀬二子塚古墳や堂山稲荷古墳出土例のように底部から口縁部に向かって徐々に径を大きくする形状のものと中二子古墳のように寸胴を呈するものがあることがわかる。七輿山古墳の事例は後者であるが、中二子古墳には貼付口縁の事例は認められないようである。

結論としては今回は厳密な意味で埴輪の型式学的検討によって七輿山古墳樹立の円筒埴輪の製作年代を導き出すことは困難であった。志村哲氏は円筒埴輪の検討結果



1～5 七輿山古墳（本報告書） 6～9 七輿山古墳（藤岡市教育委員会） 10～12 猿田Ⅱ遺跡 13～17 江原塚古墳（1/8）
18～20 前二子古墳 21～23 築瀬二子塚古墳 24～26 後二子古墳 27～29 堂山稲荷古墳（一ノ宮3号古墳）

第51図 6世紀前半の群馬県内出土円筒埴輪

0 1:16 40cm

に、周堀から出土した須恵器横瓶の年代観を加味して6世紀前半の年代を提示している⁽⁴⁾。この横瓶について藤野一之氏は氏の須恵器編年のⅡからⅢ期、MT15からTK10型式に平行する時期と考えている⁽⁵⁾。また、先に記したよう七輿山古墳出土埴輪の年代を6世紀中葉から後半に求めた山田氏は同じ本郷・猿田埴輪窯から供給された保渡田古墳群と七輿山古墳の埴輪では型式的断絶が大きく、七輿山古墳の埴輪生産にあたっては外部から埴輪製作に関する新情報の導入があったと考え、今城塚古墳にその系譜を求めることが妥当としている⁽⁶⁾。

ここでは今城塚古墳出土の円筒埴輪について詳細に論ずることはできないが、今城塚古墳に供給されたとされる新池遺跡埴輪C期の円筒埴輪を見ると、器高78cm、6条突帯7段構成の資料があり、単口縁で外面は1次調整のタテハケのみである。他に10条以上の多条突帯や貼付口縁の資料も認められる。今後、今城塚古墳出土資料の検討を通じて七輿山古墳資料との共通性を把握する必要があることは山田氏の指摘するとおりである。なお、墳丘企画の類似性が指摘されている愛知県断夫山古墳出土の円筒埴輪については、6条7段構成の存在が知られている。七輿山古墳同様多条多段の構成であるが、ロクロ成形で、須恵質、器面にC種ヨコハケが認められる「尾張型埴輪」と称されるものであり、両者の直接的な共通点は見出し難いものである。

(2) 形象埴輪について

次に、七輿山古墳出土の形象埴輪について検討してみたい。鞆を背負う男子人物(144)双脚表現の全身像は太腿以下が欠損していることから、全身の規模について復元することは困難であるが、他の事例を参考にすると人物高が85cm前後、全高が105cmから115cmと想定される。5世紀後半から末葉の保渡田八幡塚古墳出土事例では人物高81・82cmに復元されている。6世紀後半の綿貫観音山古墳作では人物高105cmであることから本墳出土の人物は人物埴輪の表現が大型化する以前のものと位置づけることができよう。

この資料では鞆の矢筒部が箱形に造られている点が注目される。群馬県内出土事例では綿貫観音山古墳の3体と前橋市今井神社古墳群2号古墳出土の事例が知られるがいずれも板状の粘土板で造られた鞆が背中に貼付されていた。また、太田市出土の挂甲装の人物埴輪も背中に

板状の鞆を貼付している。これらはいずれも6世紀後半段階に位置づけられるものである。

他県出土の鞆を背負う人物の事例としては大阪府軽里4号墳、奈良県池田遺跡9号墳、茨城県舟塚古墳、埼玉県稲荷山古墳などを確認することができる⁽⁷⁾。

池田遺跡9号墳は5世紀後半築造の造出付方墳である。男子人物が背負う鞆の矢筒部は七輿山古墳例と同様に箱形を呈し、上板が左右に延び、奴舩形している点も類似している。鍔は線刻で表現されている。埼玉稲荷山古墳例も矢筒部が箱形に造られている。

乱雑な比較であるが、矢筒部の形状が箱形から板状へと時間的経過をたどったとすることが可能であれば、七輿山古墳出土例は池田遺跡9号墳・埼玉稲荷山古墳と綿貫観音山古墳・今井神社古墳群2号古墳との中間に位置づけられるものとなろう。

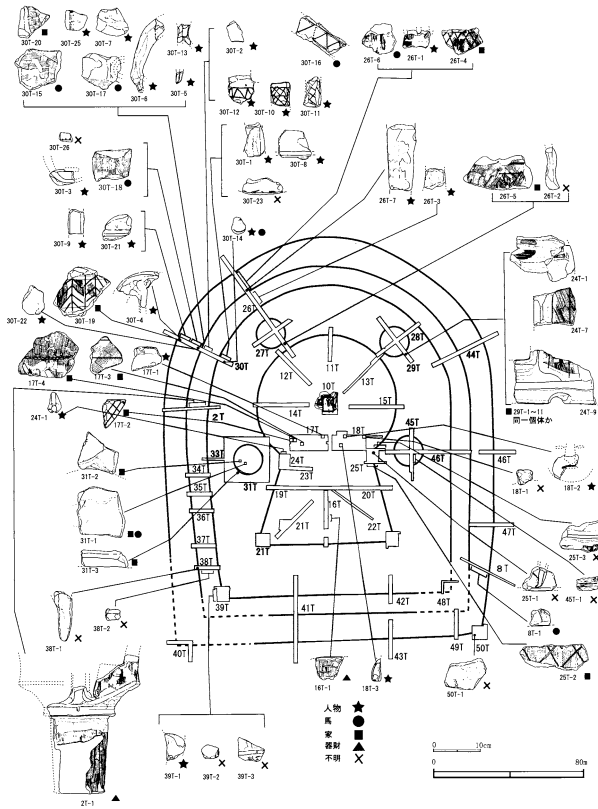
次に、双脚人物像の靴爪先部分と考えた資料(164)について記しておきたい。同様の部位は藤岡市教育委員会調査時に8トレンチ西側から出土している。破片資料で器種の断定が難しいが、靴とした場合、爪先が基台部から水平に突出した状態にあったように観察できる。これに対し、本報告の資料は、先端がわずかに基台部から離れているだけで、他は基台部に接着されているようである。本報告の資料中には基台部天井部分が出土していないため断定はできないが164は天井部がドーム状を呈する基台部に接合していた可能性を指摘しておきたい。

双脚全身表現のなされた人物埴輪の基台部の形状は扁平な円盤状から円筒形で天井がドーム状、楕円筒形へ変化することが指摘されている⁽⁸⁾。七輿山古墳の靴と基台部の形状は天井がドーム状から靴が水平に装着される形に移行する段階にあることがわかる。

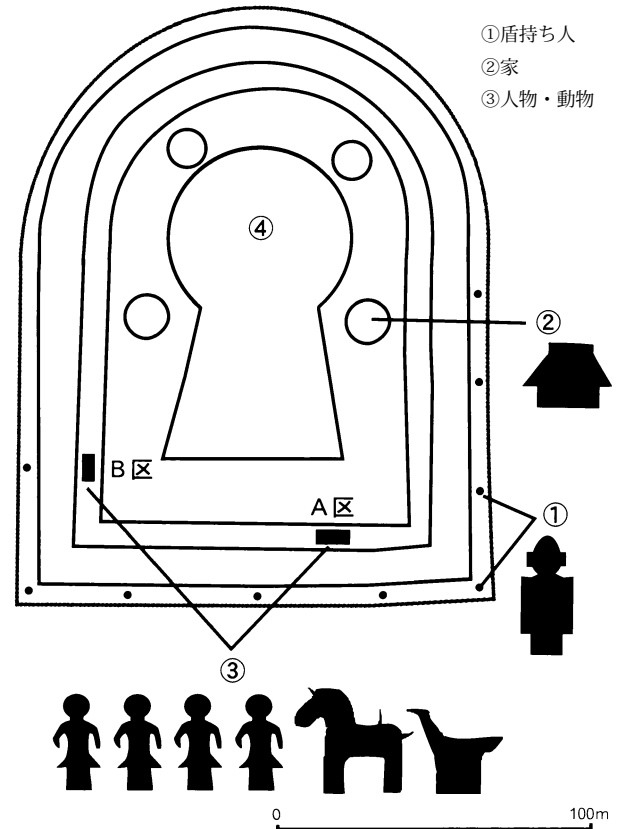
女子人物(146)の襷の表現は群馬県内では塚廻り3号墳や上芝古墳で左脇下が袋状を呈するものが見られる。肩部に紐の表現がなされるものは県内には類例がないと考えられる。埼玉県十条出土例が本例に近いようである⁽⁹⁾。いずれにしても6世紀後半になると群馬県内の女子人物において幅広い襷を肩から着用した事例は減少していることから七輿山古墳出土女子の意匠はそれ以前に位置づけられるものと考えられる。

以上のように円筒埴輪、形象埴輪の型式学的検討についてはこれまでの先行研究以上の詳細な年代を導き出す

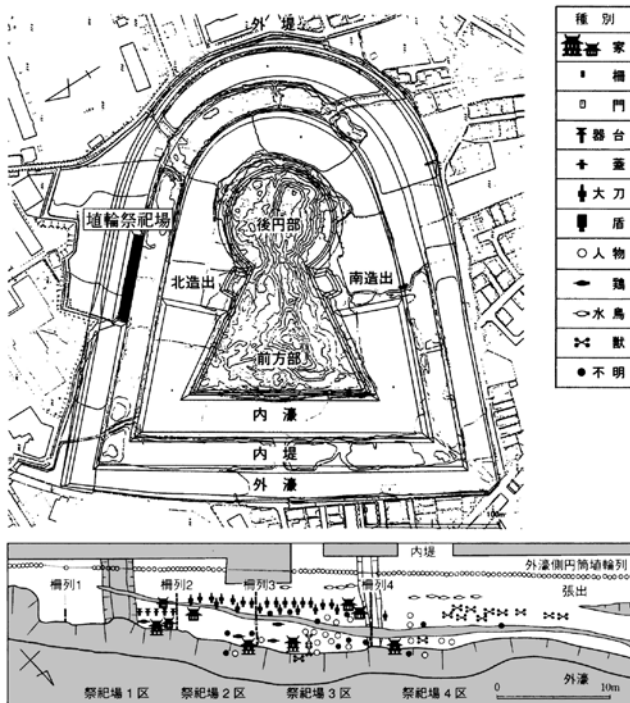
第2節 出土埴輪と七興山古墳の位置付け



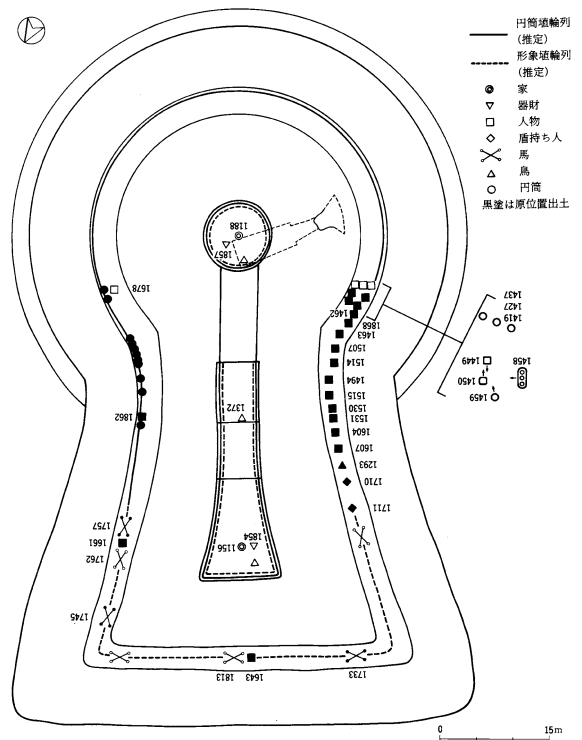
1 井出二子山古墳の形象埴輪出土状況（文献88）



2 保渡田八幡塚古墳の形象埴輪出土状況（文献89）



3 今城塚古墳の形象埴輪出土状況（文献90）



4 綿貫観音山古墳の形象埴輪出土状況(文献91を修正)

第52図 形象埴輪配列位置の変遷

ことが困難であった。今回の報告では七輿山古墳の埴輪の製作年代については6世紀前半、その中でも中葉に近い時期という範疇にとどめておきたい。

(3) 埴輪配列について

七輿山古墳では中堤の一定範囲に人物埴輪を集中的に配置していることがほぼ明らかになった。群馬県内の前方後円墳における人物・動物埴輪の樹立位置の変遷については橋本博文氏や右島和夫氏の先行研究がある。両氏とも、埴輪配列については、5世紀後半の保渡田八幡塚古墳のような周堤上から、6世紀後半の綿貫観音山古墳のような横穴式石室周辺の埴丘中段面へ移行していくことを明らかにしているが、橋本氏はその途中段階で6世紀前半から中葉には伊勢崎市剛志天神山古墳に見られるように埴丘上の前方部前端へと移動して行くと考えた⁽¹⁰⁾。これに対し右島氏は6世紀前半には5世紀後半の状況を踏襲して中堤上に埴輪配列がなされていたとしている⁽¹¹⁾。

群馬県内の前方後円墳における人物・動物埴輪の樹立は、5世紀後半の築造とされる高崎市井出二子山古墳が初源期の一例となろう。井出二子山古墳の場合、後円部寄りの中堤北半部を中心に人物埴輪が配置されたと推定されている。ただ、中堤には蓋や家も配置されていた可能性がある。5世紀後半から末に築造された保渡田八幡塚古墳では中堤上に相応の数量の人物・動物埴輪の配列区が設定され、外堤には盾持ち人が配置される。

6世紀初頭においては前二子古墳では前段階の状況が継承され、中堤上に人物が樹立されていたと考えられる。一方、築瀬二子塚古墳においては配列の状況は把握できないが埴丘上から人物や馬形埴輪が検出されている。

次の6世紀中葉の前方後円墳では堂山稲荷古墳で後円部南側の中堤上に人物・馬・盾持ち人の配置が想定される。中二子古墳においても後円部南側の中堤に衝角付冑装の武人、全身立像の基台部が配置されていたとされる。また、保渡田八幡塚古墳では外堤に樹立されていた盾持ち人が中堤に一定の間隔を置いて配置されている。

6世紀後半になると高崎市綿貫観音山古墳や太田市二ツ山1号古墳などのよう横穴式石室が開口する埴丘中段面上に人物・動物埴輪が列状に配置されるようになる。

このように6世紀前半の前方後円墳における人物・動物埴輪の樹立位置については二形態あることがわかる。一つは中二子古墳、堂山稲荷山古墳のように5世紀後半

以来の形態であるが後円部（横穴式石室）寄りの中堤上への配置である。配置位置・内容に相違があるものの6世紀前半の築造とされ、真の継体天皇陵とされる大阪府今城塚古墳における形象埴輪群の配列も中堤上である。

これに対し、もう一つの埴輪配列である埴丘上に形象埴輪群を樹立した築瀬二子塚古墳や剛志天神山古墳の状況は、帆立貝式古墳では広く採用されているが、前方後円墳における採用は客体的なものであったと考えられる。大型前方後円墳において中堤から埴丘への本格的な移行は綿貫観音山古墳になってからと考えられる。

以上のように前方後円墳における人物・動物埴輪の配列位置の変遷過程を確認した時、中堤上の一定範囲内に人物埴輪を樹立していたことが想定される七輿山古墳は、6世紀後半の綿貫観音山古墳や二ツ山1号古墳より早い時期に位置づけられることになる。同時期の前方後円墳としては中二子古墳や堂山稲荷古墳が考えられるが、前節で見たように円筒埴輪の比較からは詳細な前後関係を求めることが困難である。

人物・動物埴輪の配列位置がどの段階で中堤から埴丘上に移動するのかという点については榛名山二ツ岳降下軽石に覆われていた高塚古墳の対する検討が重要となつてこよう。高塚古墳ではくびれ部南側の埴丘上から全身表現の甲冑装人物埴輪が出土しているが、榛名山東麓の標高の高い地点に築造されたこの古墳が群馬県内における大型前方後円墳の系譜の中で埴輪配列の変遷過程を確認するに相応しい古墳であるかがやや考慮を要するところである。この点も含め今後に期したい。

註

- 1 志村哲・山田俊輔他2004「猿田Ⅱ遺跡の調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』第120集
- 2 註1文献と同じ
- 3 新山保和2007「群馬県出土の低位置突帯埴輪」『研究紀要』25 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 4 志村哲編1992『七輿山古墳範囲確認調査報告書』Ⅶ 藤岡市教育委員会
- 5 藤野一之2009「群馬県における古墳時代須恵器編年」『群馬・金山丘陵窯跡群Ⅱ』駒沢大学考古学研究室
- 6 山田俊輔2008「上毛野における畿内系埴輪の地域波及と展開」『古代文化』第60巻第1号 古代学協会
- 7 一瀬和夫・車崎正彦編2004『考古資料大観』第4巻
- 8 若松良一他1987『討論群馬・埼玉の埴輪』あさを社
- 9 塚田良通1996「人物埴輪の型式分類」『考古学雑誌』第81巻第3号
- 10 橋本博文1980「埴輪祭式論」『塚廻り古墳群』
- 11 右島和夫1995「上野型埴輪」の成立」『研究紀要』群馬県埋蔵文化財調査事業団
紙面の都合で調査報告書の掲載は割愛した。